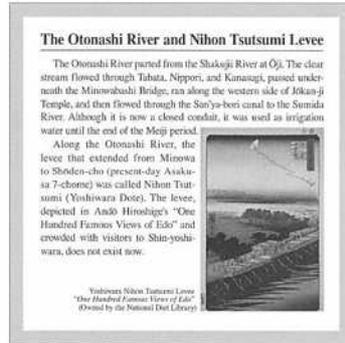


文化財News速報

英訳版 史跡文化財説明板を区内に整備

荒川ふるさと文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL03(3807)9234
登録(01)0035-2号



例 1 英訳版「音無川と日本堤」



例 2 英訳版「千住の河岸」

英訳した説明板	住所
下谷通新町	南千住 1 丁目
公春院の松	南千住 1 丁目
真正寺門前町	南千住 1 丁目
百観音円通寺	南千住 1 丁目
彰義隊士の墓	南千住 1 丁目
大関横町	南千住 1 丁目
大関屋敷跡	南千住 1 丁目
宗屋敷跡	南千住 1 丁目
石川屋敷跡	南千住 1 丁目
小塚原刑場跡と小塚原の首切地蔵	南千住 2 丁目
扱込寺（浄閑寺）	南千住 2 丁目
三ノ輪橋（音無川）	南千住 2 丁目
音無川と日本堤	南千住 2 丁目
愚川と涙橋	南千住 2 丁目
石浜城址（石浜神社）	南千住 3 丁目
真先稲荷と田楽茶屋	南千住 3 丁目
石浜神社と隅田の渡し	南千住 3 丁目
真先銭座跡	南千住 3 丁目
対鷗荘跡	南千住 3 丁目
橋場の渡し	南千住 3 丁目
回向院	南千住 5 丁目
笹の団子の如来（西光寺）	南千住 5 丁目
吉田勘兵衛の宝塔と真養寺	南千住 5 丁目
素盞雄神社	南千住 6 丁目
天王社の大銀杏	南千住 6 丁目
瑞光石	南千住 6 丁目
素盞雄神社と文人たち	南千住 6 丁目
熊野神社	南千住 6 丁目
井上省三君碑	南千住 6 丁目
下谷道	南千住 6 丁目
瑞光小学校跡	南千住 6 丁目
若宮八幡神社と八幡太郎義家伝説	南千住 6 丁目
千住製絨所跡	南千住 6 丁目
米倉屋敷跡	南千住 6 丁目
千住の河岸	南千住 6 丁目
日光道中	南千住 7 丁目
千住宿	南千住 7 丁目
砂尾堤と砂尾長者	南千住 7 丁目
日慶寺の鬼子母神	南千住 7 丁目
汐入（胡録神社）	南千住 8 丁目
袈裟塚耳無不動	荒川 3 丁目
下水処理発祥の地（妻夫塚）	荒川 8 丁目
稲荷神社（原稲荷）	町屋 2 丁目
私立井上小学校跡（満光寺）	東尾久 3 丁目
上野二葉家と満光寺	東尾久 3 丁目
下尾久石尊	東尾久 6 丁目
東京初空襲の地	東尾久 8 丁目
寺の湯跡（碩運寺）	西尾久 2 丁目
八幡神社と八幡堀	西尾久 3 丁目
八幡神社と上尾久村村絵図	西尾久 3 丁目
日待供養塔二基と延命子育地蔵尊	西尾久 6 丁目
煉瓦工場と荒川遊園	西尾久 6 丁目

令和 2 年は、4 年に一度のオリンピックキイヤー。平成 25 年（二〇一三）に東京オリンピック・パラリンピック開催が決定して以来、外国からのお客様に、スポーツだけでなく、東京の文化に触れ、親しみ、交流を深めて頂くための「おもてなし」の準備が急ピッチで進められてきました。

あらかわの文化財の案内役 荒川区では、有形文化財や史跡などを案内、解説するため、これまでに 200 本以上の史跡文化財説明板の設置を行ってきました。

一昨年の平成 29 度からは、オリンピック・パラリンピック開催を見据えた英訳版の説明板の設置事業を開始し、経王寺、本行寺、諏方神社、道灌山など日暮里地区を対象に設置してきました。

英訳版説明板で「おもてなし」 オリンピックを目前にした今年度、石浜神社、素盞雄神社、浄閑寺、三河島水再生センター、八幡神社など南千住・荒川・町屋・尾久地区の主な史跡文化財説明板に対して 52 枚の英訳版を設置しました。

成田空港、東京駅へのアクセスが良く、隅田川に囲まれ、下町情緒が漂う荒川区には、江戸東京の歴史や文化に関心が高い外国のお客様が訪れ、街中を散策しています。新たに設置した英語版の説明板は、外国のお客様と荒川区の歴史・文化、そして区民の皆さんとをつなぐ小さな懸け橋として「おもてなし」をしていくことでしよう。

過ぎゆく季節へのたより X 道灌山で薬草摘み

城跡・道灌山 江戸時代中期、享保16年（一七三二）頃に刊行された「江戸名所百人一首」という江戸の名所の風景に百人一首の替え歌を添えた絵本があります。この内の一首に、道灌山（西日暮里四丁目）に掛けた歌があります（写真1）。元歌は藤原興風の「誰をかも 知る人にせむ高砂の 松も昔の友ならなくに」で、「たれもかも しる人も せんどくわんの 山もむかしの しろあとあるに」と詠まれています。江戸時代の人びとに、道灌山がかつては城跡であったと認識されていたことが窺える一首です。挿絵の上部を見ると、敷物の上に重箱や野点のぼに用いる携帯用の茶道具らしいものが広げられ、寝そべったり、煙草を吸う人が描かれ「①太田と うくわんのしろあとだの」と呟つぶやいています。ピクニックのような感覚で、太田道灌の城跡と伝わる山の上に登って散策し、お弁当やお茶を楽しんでいたのでしょう。

観光名所・道灌山 令和元年11月2日～12月1日開催の当館企画展「あらかわと太田道灌」でも紹介しましたが、江戸時代の道灌山は、道灌の山城伝説だけでなく、季節ごとに、桜、虫聞き、薬草摘みなどが楽しめる江戸の観光名所でした。今回紹介する「江戸名所百人一首」の挿絵でも、道灌山を訪れた一団の目的が、城跡散策だけではないことがわ



写真1 「江戸名所百人一首」 どうくわん山（道灌山）
〔「日本古典籍データセット」国文学研究資料館蔵〕

かります。その様子を見てみましょう。
道灌山名物「薬草摘み」 注目すべきは下の4人です。まず右下の2人は、しゃがみ込んで「②こ、にもおじゃる」と呟いて、地面を探っています。彼らが何を探しているかは、その左隣の

女性を見ると明らかになります。「③か、さま、こつちに大ぶんあります」と呟き、手元には籠らしい持ち手の付いた入れ物を抱え、摘まれた草が顔をのぞかせています。道灌山には薬草園があつて、100種類以上の様々な薬草が群生していたことが、「武江物産志」などに取り上げられており、この地の名物でした。道灌山で草を摘む光景は、まさに薬草摘みを想起させるものです。

左端の男性は、満杯に詰まった袋を片手に隣の女性に「④おは様、いかい事つミました」と声をかけています。「いかい事」とは「たくさん」という意味なので、この男性が摘んで袋に入れたものも、薬草であると思われれます。

また、先述したように、お弁当や茶道具を広げている光景と併せて考えると、ここに描かれた一団の主な目的は明らかに行楽であると思われれます。

つまり、この挿絵には、行楽地でイチゴ狩りをするがごとく、道灌山の薬草園で、薬草摘みをレジャーとして楽しむ様子が、道灌山の風物詩の一つとして象徴的に描写されているのです。

（澤田善明）

※本稿は令和元年度「古文書に親しむ 初級編」の成果の一部である。

企画展こぼれ話 ⑫

道灌像の作者渡辺長男と

渡辺町

令和元年11月2日～12月1日、当館では企画展「あらかわと太田道灌」を開催した。ここでは企画展では語れなかった、戦前の東京市庁舎にあった道灌像の作者である彫塑家渡辺長男について紹介したい。

東京市庁舎の道灌像 区民の皆さんにとつて、道灌像といえば日暮里駅前にある太田道灌騎馬像「回天一枝」（橋本活道作）であろう。ところで、東京で最初につくられた道灌像をご存じだろうか。それは、東京都庁舎（前身は東京府・東京市の合同庁舎）の道灌像であり、これまでに3体の像が作られている。

最初の道灌像は、明治40年（一九〇七）、東京市庁舎の大玄関の中央階段上に設置された。石膏像であり、傍らには家康像もあった。元々は東京勸業博覧会の会場内に展示された日本橋模型につけられた像だった。これを移設したため、小さく貧弱と言われていた。大正9年（一九二〇）、2体目の等身大の銅像が作られた（写真1）。像の原型は渡辺長男、鑄造が岡崎雪声という。「朝日新聞」同年1月1日号に「道灌は七重八重花は咲けどもの有名な狩衣姿」、「どうしても道灌はあれが一番印象的」、「年が若かった時代であったし精悍の気分を表現することにした」と渡辺長男はインタビューに答えている。ちなみに

家康も狩衣姿の立像だった。

昭和14年（一九三九）の竹沢義夫編『東京市民読本』によれば、「市役所の玄関を入ると、正面玄関の両側に二つの銅像が威風堂々と立っている。向かつて右は太田道灌、左は徳川家康である。なぜこんな所にこの二人の銅像があるのか。いうまでもなくわが東京市にとつて最も縁の深い建設の大恩人だからである」とある。この他に東京市の刊行物の挿絵で使用されるなど、庁舎階段上の渡辺長男の銅像は東京市のシンボリックな存在だったことが窺える。

残念ながらこの銅像は、昭和18年3月30日、第二次世界大戦の金属供出により失われた。「読売新聞」は「道灌・家康像をそろえて出陣」と写真入りで記事にしている。

ちなみに昭和11年、東京市は太田道灌公四百五十年祭を開催した。この時記念品として、渡辺長男の原形を元に道灌の銅像のミニチュア千個余りが作成された。彫刻家中谷宏運により高さ1尺（30cm）程度に模造したという。材料は鉛の合金だった（村松竹太郎『東京都政秘話』昭和18年）。

戦後の昭和33年、東京都庁前に朝倉文夫の原型で道灌の銅像が復活した。これが3体目の道灌像である。平成3年、都庁が有楽町から新宿へ移転した後も、道灌像はその地に留まり、その後建設された東京国際フォーラムに現在も鎮座している。ちなみに家康像は再建されなかった。

渡辺長男とあらかわ 戦前東京市庁舎にあった2体目の道灌像は、あらかわ所縁といえる。というのも渡辺長男はこの時期、日暮里村に

住んでいた。明治44年刊の鈴木義洲編纂『東京芸名鑑』第2編には「塑像家渡辺長男」「北豊島郡日暮里村千百番地」「美術学校彫刻科の出身にして出藍の誉れ高く（中略）其作品は主に肖像なり」とある。

実は、渡辺長男は朝倉文夫の実兄であり、鑄造を担当した岡崎雪声の娘婿である。秋葉原にあった広瀬中佐銅像など、その多くは戦後の撤去で失われた。現存する著名な像としては、日本橋上の麒麟像と獅子像（鑄造は岡崎雪声）がある。

渡辺町と芸術家たち 渡辺長男が住んだ「北豊島郡日暮里村千百番地」の辺りは、「日暮里渡辺町」と呼ばれ、大正5年、渡辺保全会社によって住宅街として開発された。現在の西日暮里四丁目、開成学園付近に位置する。

昭和5年に行われた「日暮里町生産展」の美術品の項目をみると、「銅置物 日一〇四〇 渡辺長男」の出品記載がある（『日暮里町政治沿革史』昭和6年）。その他、油絵の石井柏亭や、木彫の石川確治・吉田白嶺、日本画の倉石松畝・島崎柳搗等の名前も見える。渡辺町は東京美術学校（現在の東京藝術大学）に近く、彫刻家をはじめ多くの芸術家が集う町だったといえるだろう。（高柳吟音）



写真1 「東京市庁舎大階段と江戸の建設者」（東京市役所編『東京市政概要』、昭和2年）国立国会図書館デジタルコレクションより

収蔵庫のアイテム！

十品目

3つのアイロン

— 洋裁店のアイロンにみる生活の変化 —

洋裁店の3つのアイロン 荒川仲町通り商店街（荒川三丁目）で昭和33年（一九五八）から営んでいるツカサ洋裁店の野口さんから、炭火アイロン、電気アイロン、ガスアイロンの3点をご寄贈いただきました。今回は、アイロン変遷から、生活の変化を見てみましょう。

アイロンの歴史 そもそも日本ではいつからアイロンが使われているのでしょうか。日本には古くから、熱源である炭と本体の重さを利用して、衣類のしわを伸ばす火熨斗という道具がありました。そのため、明治時代に西洋から輸入された炭火アイロン（写真1右）は火熨斗と同じように炭を熱源としたこともあり、「西洋火熨斗」と呼ばれていました。これが、日本で最初の「アイロン」です。

大正時代初期には、内部にガスバーナーを備え付けた、ガスを熱源とするガスアイロン（写真1中央）が登場しました。これにより、使うたびに炭を熨す手間は省けましたが、硬いガスホースがついていて、温度調節も難しく使い勝手が悪かったうえに、ガスパ管の敷設状況に地域差があったため、一般家庭にはほぼ広まりませんでした。

時を前後して、明治時代の終わりに輸入されたのが、現在多くの人が利用している電気アイロン（写真1左）です。電気を熱源と

する多様な電熱器の一つとして登場し、大正時代終わりには国産化されました。都市部を中心に家庭に広く普及し、その普及率は戦前の家電の中では一番といわれています。昭和40年ごろには9割となり、多くの家庭で使われるようになりました。

町の洋裁店とガスアイロン この3種類のアイロンのうち、業務用として最も使われたのがガスアイロンです。ツカサ洋裁店は、野口さんの父の代からコート、スーツ、ワンピース、スカート等を縫製し、デパートなどへ卸しています。野口さんが家業に携わるようになったころはガスアイロンを使っていたといえます。

先述のとおり、ガスアイロンはその使いにくさと、一般家庭での電気アイロンの普及もあつて、登場から間もなくして家庭からは見られなくなりました。しかし、昭和初期に改良が加えられ、使いやすい形になりました。加えて、電気アイロンに比べ火力が強く、料金が安価だったことなどを理由に、ガスアイロンはクリーニング店や洋裁店を含む縫製業で業務用としての需要を獲得したのです。

しかし、野口さんの奥様によると、ガスアイロンは温度の調節が難しく、ガス漏れなどへの配慮も必要で、取り扱いに注意が必要だったといえます。昭和45年頃に、よりきれいに皺を伸ばせるスチームアイロンが登場すると、主力の業務用アイロンの座を明け渡すことになりました。

道具が伝える社会と生活 今では野口さんご夫婦で営むツカサ洋裁店ですが、かつては住込みの職人がいたそうです。親戚も縫製業を

営み、同業者が多かったといえます。多くの店や工場、工房で使われたガスアイロンも、今となっては懐かしい道具となりました。業界を取り巻く環境が変わっても、アイロンは単なる手足の延長ではなく、今でも仕事に欠かせない道具といえます。道具は社会や生活に合わせて、姿形や熱源などを変えながら受け継がれる写し鏡のようですね。

〈岡田伊代〉

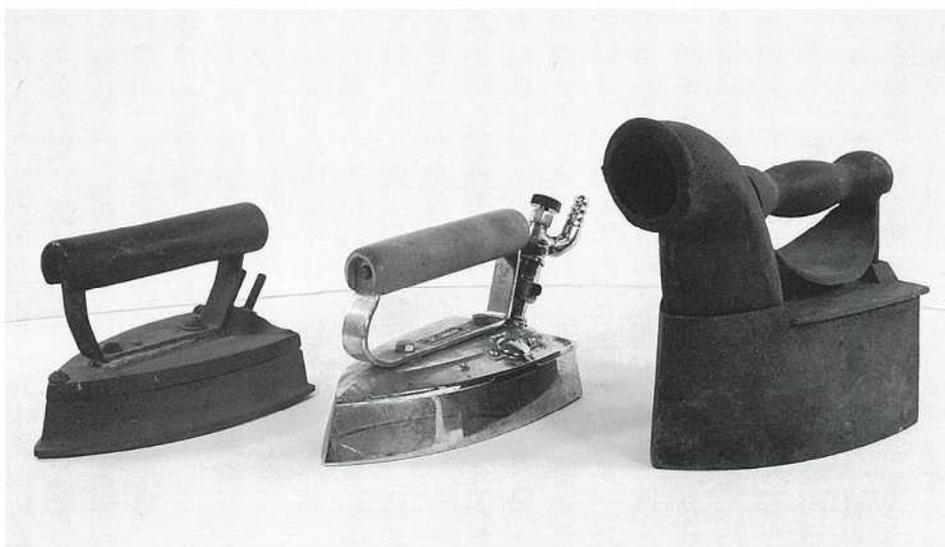


写真1 寄贈されたアイロン
右から、炭火アイロン、ガスアイロン、電気アイロン。ガスアイロンは墨田区で作られたもの。

学芸員は見た [1]

武蔵御嶽神社の

銅鳥居と石浜神社

A. こんにちは。相変わらず忙しそうですね。

B. そうでもありませんよ。この間は青梅の武蔵御嶽神社に行ってきましたし。

A. 山登りですか？ そんな趣味ありませんか？

B. いやいや、もちろんケーブルカーです。

A. 何か面白いものありましたか？

B. そうそう、こんな鳥居があったんですよ（写真1を見せる）。

A. うわ大きい。銅鳥居ですか？

B. そうです。高さは5.3mもあるんですよ。ほらここ（写真2）。

A. さん？ 「江府真先明神之神主」…

B. 全体を読んでいくと、安永9年（二七八二）に、丹後国宮津藩主松平（本庄）資承が武運長久を祈って助力した、真

先稲荷の神主、鈴木兵部平智庸と鈴木山城平庸吉が願主となったと書いてます。

A. ほうほう。

B. 鈴木智庸は、この間、荒川区指定有形文化財になった、「石浜神社鳥居（安永8年六月十六日銘）」を建てた人ですね。

A. 随分いろんなところで鳥居を建てた人ですね。

B. でもまあ形は違うんですよ。石浜鳥居なんて呼ばれてますし。石だし。

A. しかしまたなんで、ここに真先稲荷神主がでてるんですかね？

B. 真先稲荷の神主は橋場神明宮—今の石浜神社ですね—と兼帯してたんですが、武蔵御嶽神社と血縁関係があったんですよ。

A. ほおー。

B. 安永6年に、橋場神明宮の神主鈴木大炊（大領）の子の左衛門郡胤が、武蔵御嶽神社の神主家の金井家に養子に入ったんですよ。

A. へえー。

B. ちなみに東京都指定無形民俗文化財になっている武蔵御嶽神社の太々神楽は、寛

延2年（一七四九）と安永9年の二度にわたって江戸から伝えられたとされているんですが、真先稲荷から伝わったという話もあるんですよ。伝承ですけれども。

A. 安永9年に何かあったのですかね？

B. この年、郡胤は、高辻中納言家を介して「大宮司」と称する許しを得たりしてるんですよ。石浜神社の協力で、巨大な銅鳥居も建てて、権威を高めようとしていたのかもしれないですね。

A. それにしても随分高いところへね。

B. 鳥居を運んだ馬は仕事が終わって死んでしまったため、傍らに石の祠を建ててまつたという伝承もあるそうです。ということは、別のところで製造したってことなのかもしれません。もつともあそこまで馬で運べるのかわかりませんが。

A. しかし、まあ思いもよらないところで荒川区の歴史に出逢いましたね。でも、せっかくの旅行も仕事で調査をしてるみたいですが。

B. 皆さんも旅先で知っている地名とか名前見たら関心持ったりしませんか？ こういうのを見ながら歩くと、後で旅の印象が変わるかもしれませんよ。

（亀川泰照）



写真1 武蔵御嶽神社の銅鳥居



写真2 銅鳥居銘文

【参考文献】 青梅市郷土博物館編『青梅市の社寺建築』（青梅市教育委員会、一九八八年）、『武州御嶽山文書』二（法政大学・青梅市教育委員会、二〇〇五年）、片柳太郎「武州御嶽山大々カグラについて」（多摩郷土研究）一七、一九五五年）、同「武州御嶽昔語り」（武蔵御嶽講直神部、一九六五年）、『武州御嶽山の史的研究』（岩田書院、二〇一八年）

令和元年度
文化財の一年・文化館の一年

平成31年3月2日～4月14日 パネル展「句碑でたどる奥の細道の旅」
4月20日 あらわ座 七宝「東京七宝の技を体験しよう」(畠山弘氏)
4月27日～6月2日 館蔵資料展「速報!あらかわの文化財展」,「はばたけ!若手職人作品展」を同時開催
令和元年5月18日 文化財講座「尾久の煉瓦塀」(伊藤裕久氏、齊藤照徳氏)
5月19日 あらわ座 木版画彫「木版画彫の技を体験しよう」(関岡裕介氏)
5月21日・28日・6月4日・11日 古文書に親しむ「初級編」(道灌山)
5月29日 荒川区文化財保護審議会(諮問)
6月16日 あらわ座 「木版画を摺ってみよう」(川嶋秀勝氏)
7月3日 七夕まつり(南千住図書館と共催)
7月5日～7日 第40回あらかわの伝統技術展(日暮里サニーホール)
7月9日 指定文化財標柱「袈裟塚の耳無不動」建替え
7月27日～ 夏休み子ども博物館「親子で楽しむ展示解説」
7月28日・8月1日 夏休み子ども博物館「勾玉作りにチャレンジ」(八代龍門氏)
8月4日 夏休み子ども博物館「あらかわ職人道場 指物の技でマイ箸を作ろう」(渡辺光氏)
8月6日 夏休み子ども博物館「俳句をつくろう」(倉澤節子氏・市橋

洋子氏)
8月9日 夏休み子ども博物館「あらかわ職人道場 つまみかんざしの技でパッチンどめを作ろう」(戸村絹代氏)
8月17日 夏休み子ども博物館「あらかわ職人道場 提灯に文字をかこう」(村田健一郎氏)
8月20日 夏休み子ども博物館「リトル芸員」博物館のお仕事体験」
8月24日 奥の細道旅立ち330周年記念セレモニー&常設展示「奥の細道と千住」コーナー新設
8月31日 俳句交流事業で、子ども俳句相撲大会上位入賞チームを大垣市へ派遣(第三瑞光小学校 三三瑞チーム、大門小学校 Rina & Fumi)
9月3日・10月1日・11月12日・12月3日 古文書に親しむ「中級編」(道灌山)
9月10日 荒川区文化財保護審議会(有形部会調査)
9月22日 あらわ座 「彫金の技にふれよう」(田村尚子氏)
9月27日 荒川区文化財保護審議会(無形部会調査)
9月30日 「荒川ふるさと文化館だより」第42号刊行
10月1日 町田金三郎氏(前荒川区伝統工芸技術保存会会長)が東京都功労者表彰を受賞
10月3日～11月11日 あらかわ学校職人教室。荒川区伝統工芸技術保存会の職人を区内全24小学校に派遣
10月11日 史跡めぐり&観月会「おぐの細道探検!」
10月20日 あらわ座 「職人が語る鑄造の世界」(菓子満氏)
11月2日～12月1日 企画展「あらか

かわと太田道灌」
11月12日 桶谷輝明氏(鍛金)が東京都優秀技能者(東京マイスター)知事賞を受賞
11月17日 企画展記念講演会「太田道灌」(はばたき亭まさの里氏)・講演会「太田道灌と江戸」(齋藤慎一氏)
11月23日 あらわ座 「木版画摺の魅力にふれよう」(松崎啓三郎氏)
11月24日 企画展記念講演会「太田道灌とその時代」(黒田基樹氏)
12月15日 あらわ座 「江戸の技指物を知る」(根本一徳氏)
12月26日 荒川区文化財保護審議会(答申案)
令和2年1月18日～2月28日 館蔵資料展「道具が語る昭和の暮らし展PART3」
1月26日 あらわ座 「額縁の魅力に迫る」(吉田一司氏)
1月28日 荒川区文化財保護審議会(答申)
2月14日 令和元年度荒川区登録・指定文化財告示【指定】有形文化財(建造物)石浜神社鳥居(安永八年六月十六日銘)(石浜神社蔵)、無形文化財(工芸技術)つまみかんざし(保持者・石田一郎氏)、【登録】有形文化財(古文書)延命院文書(延命院蔵)、有形文化財(歴史資料)日枝神社棟札(嘉永六年六月吉祥日銘)(素盞雄神社蔵)、無形文化財(工芸技術)木版画摺(保持者・松崎浩繁氏)
2月15日 あらわ座 「鍛金の技を体験しよう」(福土豊二氏)
2月22日 奥の細道矢立初めの地子ども俳句相撲大会千秋楽(サンパール荒川)【中止】

訃報
●荒川区登録無形文化財(工芸技術・人形結髪)保持者、小島一男氏(享年90、東日暮里)は、去る令和元年9月12日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

東京都広報コンクール入賞
荒川区・荒川区教育委員会制作「伝統に生きる 木版画摺・川嶋秀勝」(平成30年度)が最優秀賞を受賞しました。
報告書刊行のお知らせ
『町屋四丁目実揚遺跡I地点発掘調査報告書』が完成しました。区内図書館で閲覧・貸出ができますので、興味のある方は是非ともご覧ください。

2月29日～3月31日 【臨時休館】
3月6日 伝統工芸技術記録映像「伝統に生きる 鍛金・桶谷輝明」完成
3月14日 あらわ座 「衣裳着人形の技でカードケースをつくろう」(竹中温恵氏)【中止】
3月20日 荒川区文化遺産地域活性化推進事業運営員会主催講演会「三河島・山車人形の魅力 山車祭礼の基礎知識4」(林直輝氏、水谷類氏)【中止】
3月31日 史跡文化財説明板「八幡神社と上尾久村村絵図」修理。英訳版史跡文化財説明板(南千住・荒川・町屋・尾久)52本設置。荒川遊園煉瓦塀の整備。「荒川ふるさと文化館だより」第43号刊行

※【中止】【休館】に関して：新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止・休館いたしました。